

2399

早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨



博士(人間科学)学位論文 概要書

<社会的なもの>の探求

— フランス社会学の思想と方法 —

1997年1月

兒玉 幹夫

〔博士論文概要書〕〈社会的なもの〉の探求 — フランス社会学の思想と方法 —

この論文は、フランス社会学史における方法論の発展過程を、〈社会的なもの〉をキー概念にして論究したものである。本論文は3部から構成されている。

第1部「〈社会的なもの〉の観念 —— 社会学的発想の形成」においては、フランス社会学の成立の過程を明らかにした。社会学の成立には、まず「社会」という観念が成立していなければならない。最初の〈社会的なもの〉の発想は、フランスでは18世紀自然法思想における社会起源論のうちに「自然状態」に対する「社会状態」として現れてくること、とりわけ国民主権論と深く関わっていることを明らかにした。次いで、社会を科学的に研究する方法の成立を、モンテスキューのうちに探り、対象の確定・類型の設定・法則的認識、人口・風土・宗教・法・習俗の相互依存、並びに一全体としての「社会」との相互関係を明らかにした点に認めた。この「方法の問題」は、第2部で詳論される。

19世紀初頭サン=シモンにより実証主義に基づく「人間科学」が提唱される。これを受けてコントは、実証哲学体系の頂点に社会学を位置づけ、諸科学の有機的連関を説き、社会学は、社会的諸要素を統一としての社会、あるいは全一なる人類との関連において捉えるべきことを説いた。コントは、森羅万象を、人間と結びつけて考えるならば、総ての科学を総合的に体系化することが可能だと考えていた。しかも、この認識の方法は、当時の分裂し、混乱し、危機の状態にある社会を克服し、統一ある社会として再組織しなければならないとするコントの実践的目標とも重なり合うものであることを明らかにした。人間科学の20世紀的展開は、やがて第3部の問題となる。

第2部「〈社会的なもの〉の論理 —— 社会学的方法の展開」では、「社会的」事実について論理的に考察する方法を探求した。まず、デュルケムの『社会学的方法の規準』を土台に、観察された諸事実について明晰・判明な概念規定をすること、続いて、類型を構成し、諸類型を類似と差異に基づいて分類し、分類されたものを比較し、そこから恒常的、一般的な傾向を見出していく、社会学的理论構築の論理的手続きを論述した。

次に、〈社会的なもの〉の形態、構造、および機能についての分析が、フランス社会学史の流れのなかでどのように発展してきたかを探求した。デュルケムによって創始された社会形態学は、ブーグレとモースを経て、アルヴァクスにより完成され、その後、人口の科学および都市形態学として発展した。また、コント以来、社会現象の構造的特質を発見しようとする試みは、デュルケムやモースを経て、レヴィ=ストロースに到る構造論の伝統をなし、〈社会的なもの〉をその全体性において捉えようとした。さらに、機能的な考

察は、文化の領域に属する諸研究に見出されるが、代表的なく社会的なもの>としての言語を研究した諸論考を検討した。言語の社会的機能は、一言でいえば「分化と統一」にある。それによって、人間社会は多様性を示すと同時に、共通分母ともいべきものをもつのである。この部では、人口学、人文地理学、人類学、言語学との相互影響による人間科学としての社会学の発展にも言及した。

第3部「<社会的なもの>と人間 —— 社会学的認識の問題」においては、デュルケムやその学派とは対照的な、タルドの社会学をとりあげ、ベルグソンの「創造的進化」や、ドゥールーズの「差異」の思想との関連から、個を重視する微視社会学的視点の特質を明らかにした。またタルドの公衆論を題材に、その相互作用論の立場を解明した。

次に、第2次大戦後における「人間の科学」の運動をとりあげ、人間・社会・文化を全体的に捉えるために、心理学・社会学・人類学の学際的協力の必要を説いた。ギュルヴィッチの深層社会学や、トゥレーヌの「行動の社会学」は、個人・集団・文化のレベルに同時に身を置く視座において、それらを全体的社会現象として捉えようとするものであったことを論述した。

ブルデューは、社会学における客観主義と主観主義の対立を克服するために、「構造化されたもの」と「構造化するもの」との相互規定関係を解明しようとした。この立場を、彼の「ディスタンクシオン」論を素材に、諸階級に分類されるものと分類するものとの関係として分析した。

最後に、フランス社会学の歴史に登場する、さまざまな思想や方法を総集し、それぞれの学史的立場づけを展望した。